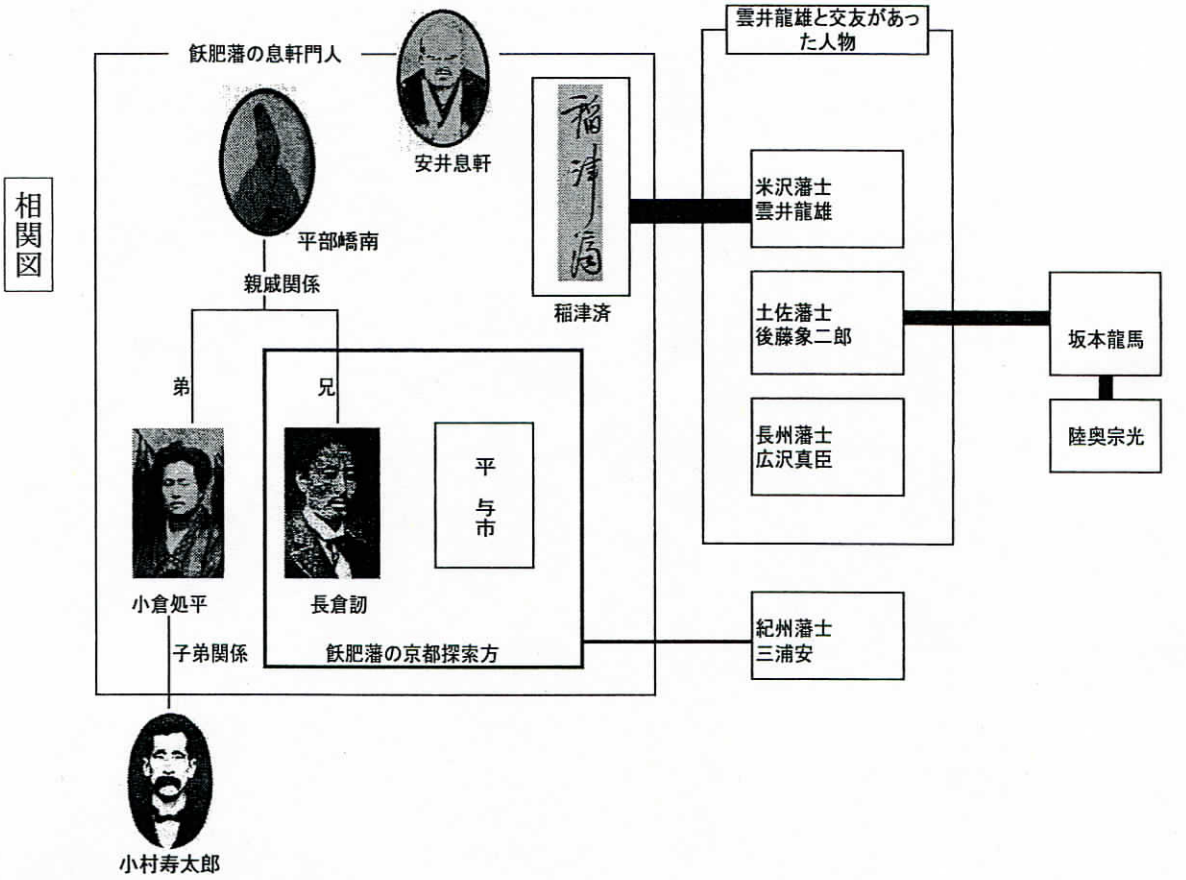

四　平与市　天保十年（一八三九）～明治三年（一八七〇）

平与市は能登国（石川県）鳳至郡花見（波並）村（現在の能登町）の出身。初め井田玄六（源六）と称し、甲村休五・藤江淪・平与市と改名を繰り返した。名乗りは義方。以下、煩雑さをさけるため平与市で記述する。与市は他藩出身ながら飫肥藩に召抱えられ幕末・維新期には京都を中心に活動し、維新後は平部嶠南らと藩政改革に取り組んだ。飫肥藩校・振徳堂に直接的な関係は無いが、藩校関係者との関わりが深い人物であった。

平与市が飫肥藩に仕官する前の経歴はよく分からない。飫肥藩士・長倉英士が、江戸で安井息軒が主宰する三計塾にいた頃、英士の学僕として息軒に学んだと言う。英士（当時は高山健次郎）が飫肥藩から江戸遊学を命じられたのは、万延元年（一八六〇）二月のことで、『及門録』によると翌月には平与市（当時は井田源六）も三計塾に入門している。英士は与市のことを「俊敏なところは無かったけれども、何事も骨身をおしまず励んだ。事務に熟練していて、特に幕府の儀式については詳しかった」と評している。恩師の安井息軒や飫肥藩の重臣・平部嶠南らからも厚く信頼されたようで、仕官にあたっては息軒の推薦によるところが大きかった。

もともと、加賀藩の士分ではなかったと思われるが、文久三年（一八六三）十二月、平与市（当時は甲村休五）が加賀藩に提出したと思われる上書が『石川県史第三編』に掲載されている。内容は「朱子学に傾倒することは、古い考えに固執することであり、能力のある者を登用するためには不都合である。中国の学問は学識があるものが国を治める方法をといたものである。このことを認識している者ならば、ことごとく登用すべきで、家来や身分の低い者でも、広く調査して、身持ちや心得がよい者、優秀な者は、読書量の多い少ないにかかわらず登用すべき」と唱えていて、朱子学に傾倒せず、古学を旨とした息軒の考えに近い思考であったことが窺える。

仕官した時期については、平部嶠南が明治元年六月の日記の中で「去年の冬より」と記しているので、慶応三年（一八六七）冬からと考えられるが、米沢藩士雲井龍雄が慶応三年二月二十三日に、京都において書いた手紙に「最近、交友していた人物」として、飫肥藩士とともに「甲村休五」の名で与市が記されているので、少なくともこの頃までには仕官が決まっていたとも考えられる。

次に与市の名が記録に現れるのは、同年十二月の天満屋事件で小倉処平の実兄長倉徳助（訒）と共に遭難した時である（「天満屋事件」に遭遇した飫肥藩士を参照）。これより明治元年五月ころまで雲井龍雄らと頻繁に接触を行っている。与市や雲井がめざすところは、新政府による会津征伐を中止に導き、内戦を防止することによって、反薩摩勢力を温存し、薩摩閥の政府内での専横を抑えようというものであった。翌年四月頃には、与市の斡旋で伊東祐帰（飫肥藩主の世継）を京都の雲井の家で面会させており、同じころ与市は雲井と盟約状を取り交わすほどであった。しかし、政府内では薩摩閥らによる佐幕勢力に対する討伐論が力を持ち始めており、与市や雲井たちは暗殺の対象となりかねない状況であった。京都での戦争回避に挫折した雲井は、奥羽列藩同盟を実現するため関東に下り、さらに米沢に向った。

閏四月十九日付、与市から関東の安井息軒に宛てた書簡によると、かなり切迫した状況が窺える。それによると「土佐（高知）や肥後（熊本）の同志らと、旧幕府を支援しようと謀議を図っていましたが、関東（旧幕府）はいたずらに罪を詫びるばかりで、無策に感じられます。関東の手緩さが目立つので、米沢藩の小島龍三郎（雲井龍雄の本名）は決心して関東に下りました。私（平与市）についても政府の要職の者が暗殺をくわだてていると、いつも土佐や肥後の人達から心配してもらっています。私への暗殺の件は、ある藩の尽力で止められましたが、政府から怪しまれていると、内々で親しい人から伝え聞いているので、関東に逃れようと思っています。おそらくこの手紙は、雲井龍雄が江戸へ持参することでしょう。」と書かれている。

ついに、明治元年（一八六八）六月二十日、与市が刑法官から呼び出しを受け出頭した。平部嶠南らが心配していると、ほどなく刑法官七～八人が与市の部屋を家宅捜査し、書籍や手紙を持ち去った。与市が佐幕論者で普段から過激な発言も多かったことから「関東に内通し陰謀を図った疑い」をかけられたのであった。刑法官からは、雲井との関係を追及されたが、「米沢藩の貢士某（雲井龍雄）は、安井息軒先生の処で同門であったので、以前から親交があった。しかし、彼と交際した者は私一人ではない、それだけで何故、会津藩を助ける考えがあると言えるのか」と反論した。雲井との会合は、新政府の要人である広沢真臣（長州藩出身）が主賓であったので、刑法局も深く追求することをはばかったのであろう。十二月には釈放され不起訴となっている。しかし、この間の拘束は与市の寿命を縮める結果となった。入牢中に宿病を煩ったのである。

与市は京都を離れ飫肥に下り、上級藩士の邸地である加茂に邸を与えられた。次に与市の名が記録に現れるのは、翌明治二年九月晦日のことで、この日平部嶠南（当時飫肥藩大参事）が与市（この頃、藤江淪と改名）を飫肥藩の会所（政庁）に呼び出し、藩政改革について意見を求めている。翌月には嶠南の強い勧めで飫肥藩大参事、及び改制参謀となり嶠南らと藩政改革に取り組んだ。この功績により明治三年四月には与市（平与市の名で史料に現れるのはこの時から）に増禄の内示があったが辞退している。この間の激務が災いしたのであろうか体調を崩し、十月二十日に療養のため油津港から大阪へ向った。しかし看護の甲斐なく翌月に死去した。享年三十二。

五　「天満屋事件」に遭遇した飫肥藩士（長倉訒・平与市）

天満屋事件とは慶応三年（一八六七）十二月七日夜、京都油小路の旅籠「天満屋」を陸奥陽之助（後の外相陸奥宗光）ら海援隊士（坂本龍馬が主宰）と陸援隊士が紀州藩士三浦休太郎（後に三浦安と改名。東京府知事）を襲い新撰組と戦った事件。

事の起こりは、いろは丸事件にまで遡る。この事件は、慶応三年四月二十三日に海援隊がチャーターした蒸気船「いろは丸」が、紀州徳川家の蒸気船と瀬戸内海で衝突した事件で、日本初の蒸気船同士の衝突事件であった。この時、三浦休太郎が紀州藩を代表して海援隊と交渉に当たったが、坂本龍馬が持ち出した万国公法によって多額の賠償金を支払うこととなった。

龍馬が暗殺されたのは、この事件から半年後の十一月十五日のことだった。海援隊士らは「いろは丸事件」で龍馬に恨みをもつ紀州藩が、新撰組を使って暗殺したという噂を信じた。そして報復の対象に、紀州藩の要人で佐幕論者であった三浦休太郎を選んだ。海援隊の動向に危機感をもった紀州藩は、新撰組に三浦休太郎の護衛を依頼したのであるが、十二月七日天満屋で飫肥藩の長倉徳助（後の長倉訒）と甲村休五（後の平与市）らと酒宴を開いていたところを、不意を襲われてしまった。この闘争で新撰組や志士に死傷者を出し三浦も負傷したが、新撰組の斉藤一らが防戦したので、三浦は命に別状なく、長倉徳助と甲村休五も無事であった。

その後も、甲村休五らは暗殺の危険を冒して明治元年中頃まで活動を続けている。

六　平トミ（墓石には平富子）

弘化四年（一八四七）～大正八年（一九一九）

江戸生まれ。飫肥藩士平与市の妻。一説によると泰平踊（日南市文化財指定）りの歌詞を作詞したと伝えられている。明治三年に夫の平与市が死去した後も、夫と親交が深かった平部嶋南・平部朝致（右金吾）・今町の川添氏（小村寿太郎の母の生家）らと引き続き交流し、明治八年頃から亡くなるまで飫肥今町に住んだ。

平トミについては、日南新聞に守山光正氏が服部源七（明治二十七年生）氏から聞き取りした話が掲載されている。それによると「私が十五か十六才のころ、父（服部文三郎、安政六年～昭和四年）が口癖のように、今町の旅衣（旅装束。泰平踊りの歌詞のことか？）は平トミさんが作りなさったということをよく話してくれました。そして、父は、トミさんは若いころ御殿奉公に上がっていて、その頃やはり若かった伊藤博文とねんごろであったという話もきかせてくれました。トミさんは川添森雄（明治三十年～昭和四十五年）さんの家（今の「いづみや運動具店」の位置）の離に住んで居られ、上品で美しい人でした」。

また、守山光正氏が川添森雄氏の話を日南新聞に掲載したものによると森雄氏は昔、平トミさんが住んでいた離に隠居していて、トミさんとトミさんが若いうち（二十三歳）に死別した夫君（平与市、明治三年十一月没、三十二才）の位牌を祀っておられ、私がトミさんのことを伺うと、トミさんの思い出をいかにも森雄氏らしい誠実な話振りで、言葉少なに話されました。川添森雄氏談「トミさんは平与市という人の未亡人で、この離に住んでおられました。平与市さんは安井息軒先生が江戸表から招かれた人で、飫肥藩の学問上の仕事をしておられたそうです。トミさんは若くて未亡人になられ、晩年までこの離で、行儀作法や裁縫などを教えながら静かに暮しておられました。たいへん上品で美しいお人柄で、お一人の頃は